

荒谷 卓(あらや たかし)  
生年月日:昭和34年秋田県出身  
略歴:昭和57年東京理科大学、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職(1等陸佐)。  
海外留学:ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。  
平成21年9月~30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。  
平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会:熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める  
著書:「戦う者たちへ」並木書房 / 「自分を強くする動かない力」三笠書房 / 「サムライ精神を復活せよ」並木書房  
熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス  
<https://musubinosato.jp/>



# 日本の戦闘者

国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里  
代表: 荒谷 卓



日本の戦闘者が、何故に強いのか。それは、「死」に対する考え方に由来する。

『太平記』に出てくる村上義光という武将がいる。後醍醐天皇の第2皇子大塔宮護良親王に仕え奈良の吉野で壮絶な討ち死にをした武将である。

大塔宮は、生涯常に第一線で、鎌倉方に対し戦い抜いた皇子である。皇子の最後は、足利尊氏の弟直義に捕らわれ獄中で殺害される。

その大塔宮は、楠正成が千早城で戦っている頃、僅か20数名の部下と共に吉野山金峯山寺において、二階堂道隆率いる数万からなる鎌倉幕府軍に包囲され、土煙を上げ荒れ狂ったように戦っていた。しかし、さすがに退路も断たれ、これが死地と決めた大塔宮は、鎧に矢を刺し顔も四肢も血だらけになったまま、吉野山の蔵王堂の前の大庭で部下と共に最後の酒宴を催した。そこへ、敵との混戦の中、仲間の酒宴の歌を聞きつけた村上義光が参上し、「ここで守り通すことは不可能、敵の手の一方の罫を破って宮は落ち延びてくだされ」「ついては、恐れながらお召の直垂と鎧兜を拝領いたす」「敵の追ってはこの義光が引き受けます。敵を欺き宮のおいのちの代わりとなりましょう」と言った。そして、村上義光は、「共に討ち死にする」という宮を押し切って、吉野山勝手明神の前の南から脱出させ、自らは宮を名乗って敵に向かって大音声を上げる。「我は、天照大神の子孫、神武天皇以来95代の後醍醐天皇の皇子、一品兵部卿親王尊雲。逆臣のために滅ぼされ、恨みを次の世で報ぜんとして只今自害する。その有様をよく見て、汝らが武運尽きて腹切るときの手本にせよ!」と言うなり、鎧を脱いで投げ下ろし、腹に刀を突き立てて、一文字に脇腹迄掻き切った上に、腸をつかんで櫓の板にたたきつけ、太刀を口にくわえて敵中に飛び掛かるように飛び落ちて見事自決した。鎌倉方これがこれに怯んでいる間に、大塔宮は無事に吉野から高野山に抜け、後の鎌倉幕府転覆に繋がる。

大東亜戦争中の昭和19年9月、台湾特別志願兵を含むモロタイ島守備隊の諏佐正吾曹長は、米軍の集中火力により腹部首貫銃創を受け気絶した。そのまま、米軍兵士に運ばれ米軍野戦病院で銃弾摘出手術を受け、そのまま2週間意識不明のまま病床にいた。ようやく

意識を取り戻した諏訪曹長は、同じ野戦病院にいた台湾志願兵から、受傷からの経緯について説明を受けるやいなや、「受傷し意識不明の間のこととはいえ、敵米軍の手に在って生き恥さらすは日本軍人としてこの上なき恥辱なり」として、縫合された傷口を自ら指で裂き、内臓をつかみ出して絶命した。これを見た台湾特別志願兵は感動し自らも日本兵として戦ったことを誇りに思い、米兵は顔面蒼白となり気絶者まで出た。

今頃の日本人は、このような話をすると「なんと野蛮な」とか「無駄死に」とかいうだろうが、それは間違っている。

前にも紹介したが、日露戦争で乃木將軍の指揮する日本兵の戦闘を見た英国人観戦記者は驚愕し「なんとという猙獰な奴らだろう!日本人ぐらい恐ろしいものはおそらくこの世に又とあるまい。何たる超人間的の猛勇だろう!この剽悍無比なる人種に対して、我々英国人も、フランス人も、ロシア人も、人間たる者からはなんら為すべき策もないのではなからうか」と手記に記録している。観戦者ですらそうなのだから、実際に日本兵と戦っている兵士たちは恐ろしく怖かったろう。それ故、203高地以降、乃木が戦場にあらわれたという噂だけでロシア軍は退却し、ついには降伏したわけだ。

大陸で終戦まで中国兵相手に戦っていた元日本兵の方も「中国兵は、こちらの100倍もあろうかという勢力でじわじわ包囲してくるんだけど、こっちは充分近づくとまで昼寝して待ってたよ。だいぶ間合いが詰まったと思ったら、突撃ラッパ吹いて攻撃すると、奴らはバツと逃げ散っていく」と教えてくれた。

私の知り合いの元OSSの米国人も言っていたよ、「あの戦争以来、毎晩、恐ろしい日本兵の夢にうなされていた」と。

戦場では、数の論理や戦術戦術だけじゃなくて、「死」と直面する人間心理が大きく働く。

概してガタイの大きいキン肉マンは、自分が攻撃しているときはやたら強いが、一転して自分がヤバくなるとあっさりギブアップしてしまう。ましてや、殺し合いの場合はこれが顕著になる。米軍のような巨大な軍隊では、兵士が「死」を覚悟することは少ない。ところが戦場テロのような予測困難な「死」を意識した途端、戦場ストレスに負けてしまう。

「死」の覚悟の仕方によって、持っている力を出し切れたり、何もできないまま終わったりするわけだ。

そこで、欧米人の「死」の捉え方と日本人の「死」の捉え方を歴史文化から見比べてみよう。

西欧のキリスト教時代、ゴットと人間は一对一の関係なので、人間個人個人の存在をゴット以外の他の存在から完全に峻別して考えた。個人は死んでもその魂が永遠に個人で在り続けるとして死後の救済をゴットにすかした。つまり、「死」は「個」にとつての神の救済の審判が下されるきわめて受動的な「死」であり、自己の救済以外の積極的な意味を持たない。また、宗教的教義から解放された近代以降は、個人個人の存在を他から独立した絶対的価値としたものだから、「死」は個人にとって世界の終わりのようなものである。だからみんな「死んだら終わりでしょ!」などと当たり前のように言う。

日本文化の「死」の考え方は、これとは異なる。日本民族の宇宙観・自然観は、森羅万象すべてが一体であるとする考えだ。ゴットのような単体で完全な神などは想定しない。宇宙全体が一つの完全体であって、宇宙を構成する一つ一つは不完全なものである。どんな神ですら一柱で完全な神などない。したがって、人間個人が完全であることなどあるはずもないし、他から完全に独立している

ということはありません。身体を創る物質は、地球自然界で循環再生されるものであり、生命エネルギーは宇宙空間の中で生成され保存され循環されるものである。空間的な一体構造というだけではなく、過去から未来まで時間的にも一体である。つまり、私たちの生命エネルギーは過去から未来へと繋がるエネルギー循環の今の状態である。だから、人の「死」は、次なる「生」への循環の一過程に過ぎない。そして、「生」こそ宇宙全体のエネルギーを生成する貴重な時間であり、人が生きる意味は全体への貢献にある。人々が和して世のため人のため「生」を全うするのが日本民族の生命観である。だから、国の名を大きく和する「大和」とした。

吉田松陰が、このことを次のように言い表している。「世には身生きて心死するものあり。身亡びて魂存するものあり。心死さば生も益なし、魂存せば亡も損なきなり。死して不朽の見込みあらばいつにても死めべし。生きて大業の見込みあらばいつにても生くべし」。

我が身、我がこと、我が財産のために生きてるやつは死ぬことが怖いだろう。自分が生きてきた意味が死によってすべて無に帰すわけだから。このような奴は、全体から見れば他がどうだろうと自分のことしか考えない「がん細胞」だ。

人の和や自然との共生にとどまらず、宇



宙自然の成長に貢献する生き方こそ本来の「生」の意義。世のため人のための「死」は、永遠なる魂の主体性の発露である。

そうやって、日本人は魂をつないできた。魂の連続性、志を継ぐ者を信じて「死」をも惜みず全身全霊をもって「生」を全うして国を守ってきた。

そういう御先祖様に「ご苦労様でした。その魂は私が継承しております。なにもご心配いりません。どうぞ安らかに御覧あれ」と、毎日毎日、禱り(意を宣り)たいものだ。



大塔宮が敵に包囲され酒宴を開いた蔵王堂前。



村上義光の墓。



特戦群戦士の魂を継承する樹。